

改宗并寺替之儀に付、正徳元年各々本多故安房守・前田近江守・前田故美作守より相違候紙面之内。

一、妻子之儀は、父・夫同宗同寺之管に候所、或受法を申立、又者祈禱に事寄、他宗に仕候儀無之管に候。若無據子細有之候者、檀方は頭々相斷候様申渡候。寺方は寺社奉行迄相斷可爲指圖次第事。

如斯候。女子致婚儀候而者、夫同宗同寺罷成候儀は勿論之儀に候。然共婚儀以後茂、親之家之宗旨之儘に而可罷在子細有之、夫任其意候者之儀は、頭々申斷、尤旦那寺に茂相違、勝手次第可仕事に候。既に婚儀以後夫同宗同寺に罷成候而茂、以後に至り親又はしうと女等之宗旨に改申度由、由緒有之斷候上は、承届申儀候得ば、婚儀以前之宗旨之儘に而可罷在子細、夫納得之上は是亦可爲其通儀に候。故無之、受法又は祈禱に事寄、改宗仕候儀有之躰に付、左様成儀は不仕様にとの儀に候。然處致婚儀候而者、兎角夫之宗旨に改不申候而は不叶儀之様にて心得違茂有之様子に付、重而如斯に候。此段寺處方承知有之様に可被申聞候。以上。

(享保八年)  
癸卯六月廿一日

奥村伊豫守  
江戸  
本多安房守

寺社御奉行中

改宗并寺替之儀に付而、寺社奉行別紙之通申聞候に付、正徳元年・享保八年相觸候紙面之寫相添、指越之候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之人々に茂被申渡、尤同役中可有傳達事。

(寶曆元年)  
十月廿九日

奥村丹後守  
前田對馬守

改宗并寺替之儀、正徳元年・享保八年兩度被仰渡、夫々御觸渡之儀に候得者、人々承知仕罷在申儀御座候所、近年右兩度御觸渡之趣心得違、寺檀納得不仕内、勝手次第寺替等仕候面々茂有之躰御座候。依之諸宗、檀方に對し及異論、每度及斷申候。諸宗一統右之段相願可申由、兼而承申候。然處曹洞宗之寺院、今般達而相願申旨、寶圓寺等被申聞候。各御僉議之上、右兩度御觸之趣向後嚴重相守、寺檀納

得之上寺替等相願可然候條、一統被仰觸候様仕度奉存候。以上。

(寶曆元年)  
辛未六月廿九日

横山木工  
生駒内膳  
多賀宇兵衛

前田對馬守様  
奥村丹後守様

改宗寺替之儀に付、正徳元年・享保八年・寶曆元年別紙寫之通相觸置候所、寺檀心得違茂有之躰に而、彼是及異論、近き頃者葬式茂指聞申族有之候。畢竟寺檀共に、右觸之趣熟得無之故に候。前々より夫・婦兩派に而罷在候者、寺檀納得之證據無之分は、其謂夫之寺に相違、納得之上改宗・寺替之儀、前格之通相願可申候。是以後茂女子致婚儀候而は、夫同宗同寺に罷成候儀勿論之儀に候。然共婚儀以後茂、親之家之宗旨之儘に而可罷在子細有之、夫任其意候者之儀者、旦那寺に茂相違、其段相願可申候。且又婚儀以後、夫同宗同寺罷成候而茂、以後に至り親・しうとめ之宗旨に改

申儀由緒有之、斷之上は承届候儀も前々之通候得共、寺檀共心得違も有之躰に付、此度改而申渡候事。

甲戌十二月

宗旨・寺替之儀に付、別紙之趣被得其意、自今心得違無之様、組・支配之人々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々は、其支配に茂相違候様可被申渡事。右之趣可被得其意候。以上。

(寶曆四年)  
十二月廿四日

本多安房守

一三 遠所之侍出府之儀御定

遠所に被遣置候侍共、用所有之金澤に罷出候ば、組頭を以拙子共方に相斷候様に組々申觸候條、被得其意、御組中可被仰觸候。恐惶謹言。

(延治三年)  
八月十四日

遠所に被指置候者共、爲伺御機嫌罷越候儀、相伺候所、公儀御役人方爲伺御機嫌參上候事無之候。ケ様に被仰出候而も、親兄弟相煩候歟、又は其身煩爲養生湯治など願候儀は、